

「2013 香港中文大学サマースクール（中国語コース）参加報告書」

京都大学人間・環境学研究科1年 雑賀広海

自分は映画学を専攻していて香港映画を研究していることから今回のプログラムに参加することに決めた。中国語も広東語も今まで勉強したことがなかったし、海外に行くこと自体、10歳の時の家族旅行以来なので初めてと言ってもいいようなものだった。だから日本語が使い物にならないという経験を初めてしたことになる。

中国語は全く勉強したことはなかったが、英語は中学1年からずっと勉強してきた。しかしそれは文章を読む能力を鍛えるだけで聞く力と話す力が全く備わっていないことが明らかになった。このプログラムに参加したのは大半が日本人だったためコミュニケーションに大きく悩むことはなかったが、日本以外の国から参加している人とはあまり多くコミュニケーションをとれなかったことが残念である。

自分は修士の1年でありまわりは学部生ばかりで、自分は日本から出るのが遅すぎたと後悔もした。しかし自分より若い人がすでに留学を経験しており海外の人と楽しく会話しているのを見て、自らの怠慢と今後の課題がはっきりして良い刺激になったと肯定的に捉えることにしたい。

香港映画を研究している人間の観点から見ると当然かもしれないが日本よりも香港の方が環境がいいとすることができる。3週間という短さでスケジュールもきっかりと定められている中で十分にリサーチすることはできなかったが、香港電影資料館や香港中文大学には多くの資料が取り揃えられており単なる香港映画ファンとしても魅力的だった。近いうちにまた香港に行って今度は長い期間滞在して研究したいものである。

香港映画が好きでもともと香港の街並みに憧れていたせいかもしれないが日本なんかには比べ、香港はただ街をぶらぶらと歩いているだけでも楽しかった。だから中国語も広東語も喋れないし英語もあまり得意ではないものの一人で映画を見に行ったり食べに行ったりしたが、それでわかったのは言葉を喋れる必要性はそれほど無いということである。ジェスチャーなどで最低限のコミュニケーションはとることができた。案外なんとかなるものである。ただもっといろいろなことがしたいという気持ちが残り、それがために日本に戻ってから独学で広東語の勉強を続けている。

遅きに失したかもしれないが今回のプログラムで世界にはいろんな国と言葉があることを体感して語学学習の意欲を掻き立てられたから、この留学は大きな収穫があった。